講座 6 へのコメント①

自分史における系統性研究

荒木　豊

学校体育研究同志会との出会い

学校体育研究同志会（以下、同志会とする）との出会いは、1957（昭和32）年頃であるが、仲間として本格的にやる気をもって活動に参加するようになったのは1958（昭和33）年以降である。

同志会へ参加するキッカケを作ってくれたのは、大学時代に同じラグビー部で苦楽を共にして活動した仲間の根本誠氏（創立者の丹下保夫氏と同郷の茨城・日立太田の出身）である。根本氏とは大学時代からの畏友・心友であり、何事も心おきなく話し合える仲で、出席の代返・替え玉受験などもあったように記憶しているが、彼の執拗な勧誘に根負けしたと言っても良いかもしれない。

仲間として一緒に勉強していく中でまず驚いたのは、学習意欲の旺盛さと貪欲さである。そして物事に対する真摯な研究姿勢と信念にも似たひたむきな取り組みである。最後には、体育の世界はオモシロ・オカシクおおらかに生きていけば……と考えていた筆者の研究姿勢の甘さに愕然とすると同時に強く反省させられた。というのは、日本の体育が今後向かうべき方向は何かとか、教育における体育の役割は何か、世界情勢の中で日本の体育・教育のめざすものは何か、など、初めて聞くと全く雲の上の話のようなことが、滔々と語られているのである。それに加えて丹下氏の茨城弁の灰汁の強さに辟易させられ、日本語が全くといっていいほど理解できず、終了後毎回のように根本氏に飲み屋で解説してもらわないと理解できなかった。そのことは研究会のストレスの解消につながっていたのではなかろうか。

同志会との出会いによって学んだ一つひとつのことが、後に山梨大学学芸学部（後に教育学部、現・人間教育学部）に赴任した後の研究姿勢や研究視野の開拓に大きく貢献したものと考えている。

同志会で学んだこと

同志会員として本格的に研究に携わるようになって特に感じたのは、今まで（大学時代）の不勉強と体育の中から世間を見ようとしていた視野の狭さに慙愧の念に強くかられたこと、そして科学的視野の乏しさに目を見開かされたことであろう。即ち、今まであまり聞いたことのない「本質論・認識論」とか「教科の存在・教育の内容研究」はたまた「弁証法的唯物論」とか「科学における認識」だとか、暫くは論戦の空中戦を聞いているようで、自分の不明を恥じることばかりであった。

当時の丹下氏、瀬畑四郎氏、中村敏雄氏、吉崎（現伊藤）高弘氏、根本誠氏など皆物凄く個性的であったが、他人の発言にはよく耳を傾けて集中していた。中でも記憶力抜群の中村氏、視座の広い吉崎氏、発想の豊かな瀬畑氏、そしてややあって鈴木善雄氏、高山（現永井）博氏らが参加し、川口智久氏がアメリカ留学から帰国されて例会に参加されるようになって、会の研究が活性化すると同時に、ドル平の研究を初め、教材研究の発展と深化に加速がついてきたと記憶している。

指導の系統性研究と系統性の創造的発表

指導の「系統性」とは、一言で述べれば「基本的な指導のすじ道、大まかな指導の順序性」を意味するが、論理的には「運動文化（狭い意味では教材）の本質に根ざした、科学的論理と発達認識に照応する形で順序づけられた中身」を意味する。

具体的な授業（学習）展開では、学習する内容を子どもたちの発達・認識に合致するように、内容を具体的に順序づけられた内容と一定の方法を意味する。

体育の指導では運動文化の本質、即ちスポーツのもつ特性や本質的構造をどのように捉えるかによって、系統性の考え方が変わるし、発達・認識のプロセスをどのように捉えるかによって、系統性の順序づけと内容が変わってくる。教師の系統性の理解と把握は、授業における子どもたちの発達・認識を保障し、直接的に影響を及ぼ

すのである。

教科の指導に直接教科書を使用する場合は、選択され配布される教科書の内容や質によって、子どもたちの発達・認識を左右しかねないので、教科書の中身とそれを選択する人たちの能力と思想性が問われるのである。

同志会の系統性研究は、水泳の「ドル平に始まりドル平に尽きる」と言われるほど、指導の系統性の原点と中身が結実していると言える。多くの教材研究・系統性の確立にドル平のもつ有意性と普遍性は、今日でも各教材研究の原点として重要視されている。

ドル平は単なる水泳の指導法だけではなく、一人の子どもも取り残さないで発達・習熟を保障しようとする思想、対象者の理解・認知に基づく指導の方法や手順を内包しているので、ドル平のもつ意義を十分咀嚼し認識して欲しいと考える。

先日も元会員であったという人の水泳指導に関わる機会があったが、一面的な理解と指導のためにドル平泳法のもつ内容が正しく継承されず、形式的な展開となり、子どもたちが多大な苦痛と未習得者が残されていた。基礎泳法からの質的発展どころか、部分的な欠点を残すことになり、逆に技術的・質的発展を妨げるような現実に直面し愕然とした。しかし当人の努力によって、重要な指導ポイントの間違いとズレがあったことの理解によって、急速に指導内容と指導法の発展を見ることができたので、ホッと安心したのは未だ記憶に新しい。

もっとも普及し普遍化しているであろうと考えられるドル平でさえそうであるから、もっと多様で複雑な陸上運動や球技の理解や普及には、更なる研究と本質的理解が必要なのではなかろうか。それは単に言葉上の「アレ・コレ」ではなく、系統性理解の本質理解に関わる重要な課題だと認識している。

体育の指導では提示された「形」を内容として理解する場合もあるが、体育は身体活動を伴う表現活動であるから、どこを意識してどのような操作をすれば、目で捉えた形を表現できるかを具体的に指摘し、指導できなければ、形を解説・説明しただけでは学習指導というよりは、テレビなどでも行っている解説と同じレベルになっているのではなかろうか。

子どもたちは学習する中身を実体験し、視・聴・味・臭・触の五感覚をはじめ、諸感覚器官（運動感覚・平衡感覚・体性感覚など）を含めた感じ方と統合能力が習得されることによって、その運動に関する身体操作の意味

や方法を認知して理解していくことになる。

体育における分かる・できるは、言語を中心とした教科の理解・認識とは必ずしも同じではなく、感覚器を通した感性的働きや、運動感覚としての筋感覚、体性感覚の一部である反射系などを含めた総合的な身体の統御・統合が必要で、単に言葉による知的理解を超えた内容を含んでいる。

しかも学習対象者である子どもたちは、発達の個人差、運動経験の質・量ともに異なる個性的な子どもたちに指導するのであるから、系統性の形式的理解や一面的な指導では、十分な指導成果が得られないのは当然である。教師は対象となる子どもたちの発達・能力を読み取ると同時に、それらの子どもたち一人ひとりにマッチするように、系統学習の中身を具体化して指導することになる。したがって、指導は絶えず研究を深めざるを得ないので、授業は個性的にならざるを得ないし、系統指導そのものも創造的に適用せざるを得ないのである。

ドル平泳法の全国的普及と会員の拡大

丹下氏が日本教職員組合（以下「日教組」）で活躍されるのは１９６０年からであるが、氏が中央講師（後に講師助言者、そして共同研究者と名称変更）として活躍された次の年頃から教育研究集会（略称「教研」）にドル平が報告されるようになり、東京代表としての第１号が高山博ではなかったろうか。

筆者は63年から助言者の一員に加えてもらい、続いて中村氏と並んで「ドル平」の系統性研究から各教材の系統指導の成果が次々と各県代表から報告されるようになって、同志会の指導・研究が全国的に普及し、会員の増加が、支部結成の礎となり、非常な活性化をもたらした。

特に中村講師の提言による東京・御岳での各県代表参加者による教育研究特別講座は、各県支部の核になるような人材養成と研究の核づくりに多大の成果を挙げることになった。そこに参加された人たちを中心に各県支部が次々と立ち上がることによって、今日の各県支部の基礎づくりになったことは、特筆に価しよう。

日本体育学会に学術的研究として「教育実践研究」を持ち込み、体育指導の根幹を築いたのも同志会であり、大学教師にゆさぶりをかけると同時に、学術研究に耐え得るような実践研究の方法と中身を確立して、全国への影響を拡大していったのである。

これも系統指導による成果がなければ、教育研究集

会でも日本体育学会でも、また今日の支部活動の活性化・普及の土台を築くことはできなかったのではなかろうか。今日の同志会の発展は、同志会創立50年史に見られるように、苦難の曲折をたどりながらも大筋の方向性として、また教育内容研究の質的発展において、系統性研究と実践の成果を抜きには語れないのではないだろうか。

系統性指導に潜む魔物

同志会の中で、一時期「系統性の一人歩き」とか「うまくしてどうする」という言葉が流行したことがある。本当に系統性は一人歩きするのであろうか。もし一人歩きがあるとすれば、系統性を利用している指導者（教師）の側に問題はないのであろうか。もちろん系統性は絶えず発展させ、実践的積み上げによって常に改変していくことは当然のことである。

同志会の創立者である丹下氏に、60年に病床に臥す前に「中村、荒木、ちょっと来い」と呼びつけられて、系統性研究はやっても良いが、系統は絶対に作るなよ！と懇々と諭されたことを今でも鮮明に記憶しているし、中村氏もあの頃はつらかったなあと感想をもらしている。丹下氏は、戦前・戦中に行われていた「体錬科・体操科」の画一的な指導内容の反省と慙愧の念にさいなまれていたのではないかと、推測している。

系統性の一人歩きが指摘されたことは、同志会研究の健全性を示すバロメーターであろうし、一人歩きをさせない努力を続けることが、系統性研究の発展を促す起爆剤となり、創造的・個性的適応を促すものと考える。系統性研究に関わってきた一人として、系統性の一人歩きや形式的適用・画一的適用に陥らないように、これまでも鋭意努力してきたし、現在でもどのように発展されることが創造的適応になるか、たゆまない努力と工夫を重ねて、実践研究の実証を怠らないようにしている。

系統性の一人歩きや画一的指導は、系統性の一面的の な理解や自分の経験の範囲内での適用であったりして、自己撞着に陥っていることに気づかないままに形のみ追い求めるような指導を繰り返しているのではないだろうか。私は「形態や現象的には変わっても、質的に発展できる技術」を基礎として提起しているのであって、ドル平の型だとか、２対０の形式的あり方が基礎または基礎的内容だとは全く述べてないし、繰り返し「質的に発展できる内容・技術」としているので、誤解がないように

再度繰り返しておきたい。

もちろん系統性を理解してなかったり、十分に系統性を咀嚼しないままに指導したのでは、子どもたちが信用して意欲的に学習するはずもないし、教師自身が十分な理解なしに系統性の指導を意欲的に実践に生かすことなどとても考えられる問題ではないと言える。

まとめに代えて

体育同志会の発展と支部の立ち上げや教育内容の進化に、「系統性研究と確立」を抜きには考えられないと思うが、「系統性指導に潜む魔物」の項で述べたように、一面では教師の形式主義・画一主義またはマニュアル主義に陥る危険性を常にはらんでいる。

奇しくも丹下氏が生前に予測し、発展過程の中で提起された「系統の一人歩き」に代表されるように、如何に立派な系統を作成しても、教師の研究と指導努力なしには、それを結実させることは不可能である。だからこそ教師の自由な研究の保障、個人で解決困難な学校教育の指導では、学校集団による集団研究の保障と制度の確立が望まれるのである。

科学的に研究され組織された系統指導であっても、時代の進歩と共に発展する諸科学の発展と無関係に存在することは不可能である。

教育方法、教育の系統性研究は、対象となる子どもたちが日々発達し、学習を重ねることによって次々と質的な変化・発展を遂げるのであるから、子どもたちの発達に呼応して教師の側の変革と指導法の発展が絶え間なく要求されるのである。

系統指導を理解し繰り返すことによって、子どもたちの質的発達がより鋭く、そして詳しく読み取ることができるようになる。実践によって教師の指導力が向上し、それらを総合的にまとめ次の指導に活かせるようになった時に、次々と新しい指導方法を生み出し、新しい課題解決の方法を発見できるので、教育・指導は限りなく面白いし、さらに個性的な発達と指導力の向上を促すのである。